



Title	<文献紹介>ロバート・ブランドム著「プラグマティズムのボキャブラリー：自然主義と歴史主義を統合する」（『プラグマティズムの諸相：古典・近年・現代』より）
Author(s)	朱, 喜哲
Citation	メタフュシカ. 2017, 48, p. 125-131
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67700
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《文献紹介》

ロバート・ブランダム著

「プラグマティズムのボキャブラリー：自然主義と歴史主義を統合する」
(『プラグマティズムの諸相：古典・近年・現代』より)

Robert Brandom, “Vocabularies of Pragmatism: Synthesizing Naturalism and Historicism,” in *Perspectives on Pragmatism: classical, recent, and contemporary*, Harvard University Press, 2011, pp.116-157.

朱 喜哲

本稿で取り上げるのは、ロバート・ブランダムによる 2011 年の著作『プラグマティズムの諸相：古典・近年・現代』の第 5 章として収録された論文「プラグマティズムのボキャブラリー：自然主義と歴史主義を統合する」である。同書はブランダムが 2000 年代に発表した、いずれもプラグマティズムに関する論文を一冊にまとめたものである。ブランダムは現代のネオ・プラグマティズムを代表する論者であり、かつ現代の英語圏におけるドイツ観念論とりわけヘーゲル再評価の一翼を担う研究者として知られており、両者を包括するプログラムとして言説についての新しい合理主義——推論主義（Inferentialism）——を推進している。同書は、このプログラムにおけるプラグマティズムの側に焦点を当てた論文集となっており、2008 年に公刊された『哲学における理性¹』が合理主義としてのカント、ヘーゲルに焦点を当てた論文集として編まれているのと相補的な関係に立っているとされる²。

ブランダムの観点から見たプラグマティズムの再構成となっている同書では、1 章と 2 章において古典的アメリカン・プラグマティズム（パース、ジェイムズ、デューイ）が取り扱われ、続く 3-5 章においてブランダムが「二人の最重要である近年のプラグマティスト」（p.32）と見るウィルフリッド・セラーズとリチャード・ローティが取り扱われる。とりわけ 4 章と 5 章ではブ

¹ Brandom, Robert. (2008a) *Reason in Philosophy: Animating Ideas*, Harvard University Press.

² Brandom, Robert. (2011) *Perspectives on Pragmatism: classical, recent, and contemporary*, Harvard University Press., p.32. 以下ページ数のみの引用はすべて同書を指し、傍点は原著のイタリック体、[] は訳者による挿入である。

ランダムにとっては博士論文指導教官であるローティを中心的かつ批判的に論じている。最後の6章と7章が現代のプラグマティズムとして、6章ではブランドム自身が『言説と行為の関係³』で展開する分析プラグマティズムの素描、7章ではブランドムと並んで現代のネオ・プラグマティズムを代表するヒュー・プライスがローティの強い影響下に構築する表出主義のプログラムにおけるブランドム自身の立場が述べられる。

このようにプラグマティズムの系譜について包括的で広い射程を持った議論を展開する同書において、もっとも紙幅が割かれているのが本稿で紹介する5章のローティ論である。本論文は、ふたつの点から注目に値する。ひとつには見通しの効いた秀逸なローティ論として、もうひとつはブランドムが批判的に継承した源泉として。まず前者については、20世紀後半のアメリカ哲学を代表する一人であるローティだが、その体系性を忌避したスタイルもあって彼のプログラムをひとつの視野におさめることは困難を極める。それゆえ、とりわけ分野横断的な活躍を見せた中期以降の政治哲学などが切り出されて論じられることが多い中、前期の分析哲学領域での業績から一貫通貫したローティ像を提示した本論文はきわめて稀である。また後者については、本論文におけるローティ論全体をブランドムが批判的に継承したローティ哲学のエッセンスとして読むことができる。ブランドムがローティからの影響関係を明示的に語っている希少な論文としても注目に値するのである。

以下、本稿では当該論文の内容について、まず構成と主題を整理する。その上で議論の流れに沿って、ローティ哲学のブランドム流の再構成を追い、両者の対立点についてもその過程で確認する。なお、本論文の初出はブランドム自身が編者を務めたローティについての論文集『ローティとその批判者たち⁴』であり、同論文集にはローティ本人からの応答論文⁵も掲載されている。そこでの応答についても、本稿の関連する箇所に触れたい。

1. 本論文の構成と主題

本論文は12節からなる。以下に節立てを記す。

- I. ボキャブラリーにおけるローティ
- II. 消去的唯物論
- III. プラグマティズムと表象
- IV. 規範と因果
- V. 遠すぎた橋？
- VI. 知識についての社会的プラグマティズム
- VII. 信頼性についての社会的プラグマティズム
- VIII. ボキャブラリーについてのボキャブラリー

³ Brandom, Robert. (2008b) *Between Saying and Doing: Towards an Analytic Pragmatism*, Oxford University Press.

⁴ Brandom, Robert. (eds.) (2000) *Rorty and His Critics*, Blackwell Publishing, pp.156-183.

⁵ Rorty, Richard. (2000) "Response to Brandom" in Brandom (eds.) (2000), pp.183-190.

- IX. 道具としてのボキャブラリー
- X. ボキャブラリーと公／私の分離
- XI. 言説的实践
- XII. プラグマティズム的形而上学

これら 12 節は大きく三パートから構成されている。まず、I-III 節はローティの前期の分析哲学領域における業績から中期の政治哲学、後期の文芸批評までを一貫して理解する視座を提供する見通しの効いたローティ論になっている。ここではタイトルに掲げた「ボキャブラリー」を中枢的な概念としてローティ哲学全体が描き出される。続く IV-VII 節では前パートで描かれたローティ哲学を批判的に継承するべくブランダム自身の論点が示される。それはローティ由来の「ボキャブラリー」概念を採用して反表象主義を維持しつつも、「事実 fact」を復権させる試みである。この点に両者の対立があるが、この論点は他パートから独立に議論されている。最後の VIII-XII 節では副題である「自然主義と歴史主義の統合」という観点からローティ哲学が再構成される。

本論文は、全体として簡にして要を得た見事なローティ論となっており、ローティ自身も上述の応答論文のなかで対立する IV-VII 節以外のパートについて「熱狂的に賛同する⁶」と賛辞を送っている。ローティその人の賛同もさることながら、私見では本論文がローティ論として価値をもつのは、ローティが広く知られたきっかけである 1979 年公刊の主著『哲学と自然の鏡⁷』においてセンセーショナルに表明された近代西洋哲学への批判や、続いて 1989 年に公刊された『偶然性・アイロニー・連帯⁸』以降の政治哲学領域での業績をそれ単独で論じるのではなく、あまり参照されない 1960 年代の分析哲学領域での業績である消去的唯物論を唱えた時期からの一貫したプログラムとして捉える視野の広さである。こうした観点は『哲学と自然の鏡』公刊前の 1970 年代にプリンストン大学においてローティを博士論文指導教官として仰ぎ、その影響下にありながらも独自の体系的プログラムを推進するブランダムならではのものといえるだろう。本論文におけるブランダムのローティ哲学の受容と離反を追うことで、ネオ・プラグマティズムのひとつの系譜を確認することができるのである。

2. 「ボキャブラリー」から見た消去的唯物論

ブランダムは本論文において「ボキャブラリー」概念を中枢に位置づけ、その観点からローティ哲学を初期から後期まで連続したプロジェクトとして描き出す。本節では、まずこの描像について紹介したい。

ローティ哲学の中枢概念とされる「ボキャブラリー」とは何だろうか。もちろん、単に「言語」や「言葉の使い方」ということではない。ブランダムによれば、ローティのボキャブラリー概念

⁶ Rorty (2000), p.184.

⁷ Rorty, Richard. (1979) *Philosophy and the Mirror of Nature*, Princeton University Press. (R. ローティ (1979=1993) 『哲学と自然の鏡』, 野家啓一ほか訳, 産業図書)

⁸ Rorty, Richard. (1989) *Contingency, Irony, and Solidarity*, Cambridge University Press. (R. ローティ (1989=2000) 『偶然性・アイロニー・連帯』, 齋藤純一ほか訳, 岩波書店)

はクワインによるカルナップおよび論理実証主義批判に由来する。クワインは経験主義のドグマを批判して、「意味／信念」や「言語／理論」などの区別が不可能であると主張した。わたしたちは広範な信念群や手持ちの理論による仮説なしには、ことばの意味や他者の用いる言語について考えることなどできないのだと。

もしクワインが正しいならば、私たちは自らの言語的实践について、それが意味の構造としての言語と信念の構造としての理論とに区別してなされる語り口にコミットすべきではない。実証主義者たちがこうした概念に訴えておこなってきた仕事を引き継ぐ考え方としてローティが提案したものが「ボキャブラリー」である。クワインの指摘が受け入れられる以前、私たちは言語や意味の変化を、理論や信念の変化から区別しなくてはいけなかったのだが、ローティの薦めた語法によれば、私たちはただ単にボキャブラリーの変化について語ればよいのである。(p.117)

こうした導入経緯からして「ボキャブラリー」は、言語実践を全体論的に捉えるための用語法である。ひとびとが「エーテル」について語るのをやめて「原子」について語るようになったときに、言語の意味が変化したのか、それとも信念体系が変化したのかを問う必要はない。ただ用いられるボキャブラリーが変更されたのだと言えばよいのである。ブランドムは、これを心身問題において実践して見せたのがローティ初期の業績である「消去的唯物論」であると述べる。

わたしたちはかつて本当に心を持っていた（そして今も持っている）のだが、わたしたちの心を消失させる効果を持っているボキャブラリーの変化を有意味に考えることができる。こうしたボキャブラリーの変化の結果として、わたしたちは依然としてわたしたちであることを辞めることはないまま、もはや自らが心を持っているとは説明しなくなるのである。(p.118)

消去的唯物論によれば、ボキャブラリーをとまなう言語的实践の変化を説明することで、心身問題は解消される。わたしたち現代人が多くの場面で採用する自然主義的なボキャブラリーにおいては、たしかに「心」の居場所はない。しかし、このことからわたしたちは旧来の「心」は表現できないがたしかに存在する（二元論）のか、それとも、わたしたちが「心」と呼んでいたモノやコトが自然主義的なボキャブラリーにおいてより正確に表象されている（唯物論）のかを問う必要はない。一方で世界の側に「意味」とその構造である「言語」が、他方でそれについて保持される「信念」やその構造である「理論」が存在するという二元論が放棄されたならば、そもそもこうした問いは意味をなさないからである。

消去的唯物論が説くのは、自然主義の台頭によって起きたのは単に「ボキャブラリー」の変化なのであって、新たに導入されたボキャブラリーをただしく運用するならば、わたしたちは「心など存在しない」かのようにふるまう。しかし同時にまた、過去に用いられ現在も流通する「心」

を含む旧来のボキャブラリーを用いる際には、その規則にしたがってただしく「心」を扱うこともできる。ふたつのボキャブラリーはかならずしも整合的ではないが、そのこと自体は問題ではない。わたしたちは各々のボキャブラリー運用の規則さえ訓練されれば、目的に応じて使い分けることができる。ふたつのボキャブラリー間の関係が問題になるのは、いずれがより正確に世界を表象しているかを決定し、そちらに他方を還元してしまおうという無益な試みを行う場合のみである。

こうした点で、消去的唯物論にはローティの代表的な主張である「反表象主義」の立場がすでに表れている。ブランダムによれば、ローティの反表象主義の要点とは「ボキャブラリーがボキャブラリーでないものに対して応答するという〔表象主義の〕アイデアを放棄するのではなく、このアイデアを表象とは異なる観点から再解釈するというもの」である。(p.120) ボキャブラリーが応答しているのは社会的な言語実践であり、そこではたらく規範性である。「心」を自然主義のボキャブラリーと調停したいという心身問題の要請は、「心」をもちいたボキャブラリー運用に際してともなう認識論的な規範——一人称報告の訂正不可能性認識論的権威——をどう取り扱うかという問題である。そして、この問題は、実際の社会的言語実践の明晰化を通じてしか理解されえない、というのが消去的唯物論の暗黙的な帰結なのである。

ブランダムの考えでは、ローティの中期以降の仕事は、初期の消去的唯物論において暗示されていた社会的言語実践の解明を目標とし、ボキャブラリー使用を道具使用に見立てた「道具的プラグマティズム」を通じて取り組むものである。このように一貫して、社会における言語実践の解明に取り組んでいたローティという像は、よく彼に向けられる批判である「言語的観念論⁹」者であり、「われわれが手にすべき真理も客観性も存在せず、あるのはただ連帯や共同体における合意、あるいは仲間うちでの会話で済まされるものだけである¹⁰」といったカリカチュアとは異なっている。ブランダムによれば、ローティが念頭においているのは「ボキャブラリー」そのものではなく、それを通じて織りなされる社会的実践の構造である。たとえば認識論的権威やそれに関わるボキャブラリーを用いた規範の構造を明らかにすることを通じて、わたしたちは事実や客観的な世界についての言説をも理解することができる。ただし、こうした点を強調するか否かはブランダムとローティで立場が分かれており、ブランダムは客観性や事実の取り扱い可能性を強調するが、ローティはより慎重である¹¹。

3. 自然主義と歴史主義の統合

ブランダムはローティ哲学を「ボキャブラリー」を通じて社会的実践を明らかにする「道具的プラグマティズム」として再構成する。道具的プラグマティズムでは、競合する複数のボキャブラリー間の比較というものは、各々の目的の相違からなされるべきであり、目的を離れてボキャ

⁹ Marvan, Tomas. (2011) "Is Rorty a linguistic idealist?," *Human Affairs* 21 (3), pp.272-279.

¹⁰ Cheryl Misak, ed., *New Pragmatists*, Oxford University Press, 2007, p.1.

¹¹ 両者の対立点の詳細な検討については以下を参照。朱喜哲 (2016) 「奈落の際に踊る哲学——ネオ・プラグマティズム第三世代による「表象」概念回復の試み」, 『メタフュシカ』第47号, pp.23-34.

ブラリーそのものの優劣など論じられないと説く。こうした言語実践を明らかにする道具としてのボキャブラリーは、どのようなバリエーションを備えるのだろうか。

ブランダムによれば、それは大きくふたつに区別される。ひとつは「ボキャブラリーについてのボキャブラリー vocabulary of vocabularies」である。これは、すでに流通しているボキャブラリーを用いた言説的实践すなわち推論的な正当化に際してやりとりされる理由の明晰化をおこなうボキャブラリーであり、規範や権威に言及する。もうひとつは「因果についてのボキャブラリー vocabulary of causes」であり、これは新たな発見をともなって導入される因果関係に関わり、物事の原因について言及するボキャブラリーである¹²。(p.133)

これらふたつの道具的ボキャブラリーは、たしかに目的が異なるものであるが、しかし相互に理解不可能というわけではない。なぜなら、これらのボキャブラリー自身もまた他方のボキャブラリーによって再記述されうるからである。正当化に関する言説的实践を分節化する「ボキャブラリーについてのボキャブラリー」は、こうした実践を行うのがほかでもないわたしたち自然に属する生物であるという点において「因果のボキャブラリー」で再記述しうる。また、わたしたちはアリストテレスの諸原因とニュートンの諸原因のそれぞれについて語り、比較することができるが、このとき各々の「因果についてのボキャブラリー」を俎上に載せ、歴史的経緯や実際の便益などを検討する際には「ボキャブラリーについてのボキャブラリー」を用いることになる。

こうした両方向のメタ的な言及のうち、前者のようにあらゆる理由をめぐるボキャブラリーの担い手がわれわれ自然に属する生物であるという方向において「自然主義」への、また後者のように原因を探究するボキャブラリーもまた言説的实践の見地から検討可能であるという方向において「歴史主義」への、それぞれのコミットメントが成立するのである。「ボキャブラリー」という同じ視野から自然主義と歴史主義の両者を捉えるという戦略は、ローティが『哲学と自然の鏡』において以下のように述べる 20 世紀後半の哲学の状況診断に根差している。

もし哲学があまりに自然主義的なものになるならば、それは手強い実証諸科学によって押しつけられてしまうであろうし、またあまりにも歴史主義的なものになるならば、それは思想史や芸芸批評やその他の似たような軟らかい「人文諸科学」によって飲み込まれてしまうであろう¹³。

ブランダムは、ほかでもないローティ自身が自然主義と歴史主義の双方を兼ね備えた哲学のプログラムを構想していたと考えるのである。この戦略の中核にあるのがボキャブラリーについての「道具的プラグマティズム」であり、ボキャブラリーをともなう言説的实践は単一の目的をもたないとする「言説的多元論 discursive pluralism」である。この立場からは、たとえば「より正

¹² この区分は、前節で見たように「ボキャブラリー」が全体論的な企図から導入された概念であることからすると奇妙に思われるかもしれない。ブランダムは、ローティが実際的な区分として「因果／規範」の二元論を採っていると考えている。それはローティが「理由の空間」を信念間の正当化（規範性）の関係のみから成り立つと考え、因果性を排除することに由来する。

¹³ Rorty (1979), p.168. (邦訳 183 頁)

確に世界を表象する」といった表象主義的な目的は、文脈に応じた多彩な目的のうちのひとつに過ぎない。この目的に照らせば認識論のボキャブラリーは有益だが、それは関心相対的な尺度であり、あらゆるボキャブラリーは道具として各々の目的に奉仕し、特定の目的が設定されて初めてその尺度から比較することができる。そこでは唯一の特権的なボキャブラリーは存在しない。したがって、自然主義と歴史主義それ自体もまた、それぞれの目的の違いから説明され、両者はローティのプラグマティズムのふたつの側面なのである。

自然主義的プラグマティズムの目的は、わたしたち自然に属する有機体が共通して抱える生存、適用、生殖といったものである。こうした目的に対しては予測や安全管理を可能にしてくれる因果のボキャブラリーが道具として優秀である。この目的は、つねに未来に向けて設定される「共通の関心」であり、この共通の関心を背景に「進歩」を論じることさえ可能になる。たとえば医療技術の進歩について語る時、わたしたちは自然主義を採用し、古代エジプトと現代の医療を比較することができる。これは、公共的なボキャブラリーとも親和的である。

他方、歴史主義的プラグマティズムの目的は、原則的に過去に向けて設定される。というのも、歴史主義では目的となりうる「関心」そのものが特定のボキャブラリーの産物としてのみ理解可能であるからである。19世紀の写実主義や中世の錬金術における論争を検討する際には、過去の歴史的な到達点から逆算された「進歩」について評価しなければならない。歴史主義は、ボキャブラリーの産物——「受肉したボキャブラリー¹⁴」——であるところのわたしたちとその文化が、いかに新奇なものたりえたかを過去に照らして論じ、ボキャブラリーによる創造性と啓発性を重視する。歴史主義における目的は、それ自体がボキャブラリーの交代にともなって打ち捨てられたり、新たに創造されたりする。したがってこれらは私的でアイロニカルなボキャブラリーと親和的である。

これらふたつの異なる目的をもったボキャブラリー運用は、いずれも「ボキャブラリーについてのボキャブラリー」によって明晰化することができる。それは、言説的実践においてはたらく規範性の明晰化というブランダムその人のプログラムと一致する。自身に至る一連の反表象主義的な言説的実践の解明。それこそが、ブランダムがローティ哲学のエッセンスとして継承する「自然主義と歴史主義の統合」なのである。

(ちゆひちよる 哲学哲学史・博士後期課程)

¹⁴ Rorty (1989), p.80. (邦訳 167 頁)